



## 新組織発足にあたり

神奈川県農業技術センター所長 初瀬川 政典

「神奈川県農業技術センター」は、県行政システム改革の中で進められております出先機関再編の一環として、従来の「農業総合研究所」と「地域農業改良普及センター」を統合して4月から設置されたものです。

農業総合研究所は「試験場から研究所へ」のコンセプトを元に、研究が行われて来ましたが、発足してから10年を経過し、農業の生産現場からやや疎遠になる傾向がありました。また、研究部門の組立が作物別でないため分かりにくく、電話等での相談がしにくい等の声が起こって参りました。

一方、農業改良普及センターの普及事業につきましては、昭和23年以来50数年にわたり農家と共に歩む普及事業として展開し、生産技術の改良や農家生活の改善により時代時代の農業課題に現場で取り組んで参りました。しかし、産地育成から地域興し、様々な技術指導など多様な業務を求められるとともに、農業者が必要とする技術レベルが高度化したこと等により新たな展開が求められて参りました。



今回、県の行う農業行政の中で「研究開発業務」と「普及指導業務」を一体的に行う組織とすることにより、新しい生産技術や経営技術をより農業者の生産現場に近い形で研究が可能となり、この研究を間近に見ながら普及指導員により研究成果が迅速に現場へ普及できることとなります。

また、生産現場での技術的な課題についても普及指導員が直ちに研究員と相談でき、緊急にとるべき対策や当センターでの試験研究課題の設定についても迅速に進むものと確信しております。

私たち職員一同は、かながわ農業の振興のために農業者の生産・経営技術部門の支援をする組織として、新たな気持ちで臨んでいくつもりであります。気軽に立ち寄っていただき、相談できる組織として進んで参りたいと思いますので、大いにご活用くだされば幸いです。



## レーザー光を用いた新しい堆肥分析装置を㈱東芝と共同で開発しました

### 農業環境研究部

環境保全型農業（環境にやさしい農業）では、堆肥の施用による土づくりの推進が求められています。

しかし、堆肥の中にも養分が含まれているため、必要以上に農地に施用した場合は養分過剰となり、硝酸性窒素の地下水汚染や土壌への養分の過剰蓄積などの環境影響も懸念されます。このため、堆肥中の養分を考慮した施肥をおこなうことが必要です。

従来の堆肥の成分分析では、(1)装置の取り扱いに高度の専門性が必要 (2)分析サンプルの作成に硝酸、過塩素酸等の強酸を用いた長時間の前処理が必要 (3)前処理中に有害ガスが発生するため、排気処理施設が必要であり、限られた分析機関でしか対応できないため、簡易で迅速な堆肥分析法が求められてきました。

このため、当センターでは、㈱東芝と共同でレーザー光を用いた新しい堆肥分析装置を開発しました。

今回、新たに開発したレーザー光を用いた堆肥成分分析装置は、試料に直接、レーザー光を照射することによって発生する固有の波長の蛍光を検出することにより分析を行うことができます。

この方法では、窒素、リン酸、カリウムなどの肥料成分に加え、炭素についても一括で迅速に分析することができるため、従来の測定法に比べ、測定に要する時間を非常に短縮することが可能です。また、従来法のような強酸による分解処理も不要なため、環境にやさしい測定法です。

